

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K16812

研究課題名(和文) 明代の史書と歴史文学の相互関係

研究課題名(英文) The Interaction between Historical Writings and Historical Literature in the Ming Dynasty

研究代表者

川 浩二(KAWA, Koji)

立教大学・ランゲージセンター・教育講師

研究者番号：30386578

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：明代における、また明代を題材とする歴史書と歴史文学について、さまざまな史書と長編・短編の歴史小説、文人による歴史劇・民間の歴史劇、文人の詠史詩と歴史小説の詠史詩を対象として、史書と歴史文学の相互的な関係の一端を解明した。そのさい、ある話柄が文芸内のみならず、史書と文学という垣根を越えて伝わる様相に着目した。具体的には、万暦年間後期に歴史小説『雲合奇蹤』が制作される際、現代にまで伝わる地方演劇『太平春』の原型にあたる民間の歴史劇が影響を与えたのではないかと、という見通しを立てることができた。また、建文年間の朝臣に関する異説や逸話が史書や歴史文学の間を横断しながら伝えられたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study is about the interaction between historical literature and historical writings in the Ming dynasty. Mainly focus on various historical documents, and historical fiction (novels, drama, and poetry), revealed the interaction between historical literature and historical writings. The historical novel "Yunheqizong" was published in the Wanli Period, it is possible that taken some stories from some historical drama. that continues to be played to the present day named "Taipingchun". In this era, it seemed both historical writings and literature intentionally ignored the facts. But their primary aim was to create the epitome of allegiance. So the bureaucrats in the Jianwen period regardless of whether such facts are true or false, must be portrayed in order to demonstrate their allegiance.

研究分野：中国文学

キーワード：歴史文芸 歴史小説 歴史劇 詠史詩

## 1. 研究開始当初の背景

明代には明代史の書籍が多数出版された。しかしそれらは清初の史学を牽引した王鴻緒や朱彝尊に激しく批判されることから始まり、『明史』編纂と『四庫全書』のための書籍の整理の過程において、その多くが否定され、再版されることが無くなっていった。

現代の中国学において、明代に出版された明代史書についての研究が遅れていたのも、主に考証学から見た価値が乏しいことによると考えられる。その後の長い空白を経て、2000年代に銭茂偉や楊艶秋らは考証学の立場からの価値によらず、史書出版の状況に着目することで、文化現象としての明代史学史の研究を進め始めた。

いっぽう、明の太祖朱元璋を主人公とする通俗文芸である「明英烈」に対する研究も、1990年代以降の歴史小説や史劇の研究において立ち後れていたといえる。これは主に他の時代についてはある程度見通しの立っていた、歴史文学と史書の関係の整理が進んでいなかったことによる。

研究代表者は、明代において、史書出版が異常なまでの活況を呈していた状況のもと、歴史文学の作品が史書の出版と連動しながら制作されたことが、他の時代の歴史文学と異なるという視点から、明代の歴史文学の制作の様相を解明することに重要な意義があると考え、博士課程在学中から明朝開国の物語を中心に研究を進め、学位論文『明代の史書出版と白話文芸』により、研究の基礎を作った。

このさい基本的な立場として、史書の内容とは深く関わっていない状態で育ってきた「明英烈」の物語が、嘉靖後期に出版された編年体史書『皇明通紀』の流行を包摂することにより、『皇明英烈伝』という史書に依拠した歴史小説として制作されたという見通しを示した。

その後、天一閣博物館蔵『国朝英烈伝』の内容を検討し、これが『皇明通紀』の影響を受ける前の「明英烈」の物語文学作品であると論じたことは、この見通しの証明にあたる。また、『皇明英烈伝』のような史書に強い影響を受けた歴史小説が、史書に準ずる存在として、逸話や異説を載せて広めている様相についても研究を進めてきた。

研究代表者のこれらの研究の過程で開けてきたのは、明代の歴史にまつわる史書と歴史文学の全てが、互いに矛盾することもある逸話や異説を残し続けるようにはたらいっていた、という視点である。史上の事件や人物の逸話や異説について、筆記や一部の史書、そして歴史小説のようにそれを事実であるかのように扱うもの。明代においても万暦年間以降の史書がしばしば行ったように、考証し否定することによって逸話や異説に注目を向けるようになるもの。さらには文人伝奇や詠史詩のように、作者が明らかに逸話や異説を否定するような材料を持っていながら、

あえて文芸の中で逸話や異説を残すもの。それぞれの媒体は立場を異にしつつ、明代中期から清代前期まで、あるいは無自覚に、あるいは自覚的に、さまざまな言説を残し続けていたといえよう。

こうした視点に基づき、研究代表者は明代の史書と歴史文学の関係を、史書から歴史文学へという一方向のプロセスではなく、断続的に起こる異説や逸話の引用あるいは制作、史学としての考証、文学としての撰取と変化を、相互に影響し合うものとしてとらえる研究を着想した。

## 2. 研究の目的

本研究の最終的な目的は、明代を題材とした史書と歴史文学の関係の全体像を描き出すことにあり、基本的には史書も含めてそれが文学テキストであるという立場を取る。そのため史書と詠史詩・歴史小説・史劇(文人による戯曲)・史劇(民間演劇のための台本)などの歴史を題材とした文芸までを研究対象とし、相互の関係を検討する。

それぞれの資料の特徴を、内容の批評性の高低と作者の社会層の高低によって示せば、さまざまな特徴を持ちうる史書・筆記の周囲に、詠史詩・歴史小説・史劇(文人による戯曲)・史劇(民間演劇のための台本)が配されるイメージとなる。

詠史詩は史書・筆記の作者と同質の、進士や挙人といった社会的地位や学識を持つ文人層によって作られた。いっぽう歴史小説は史書に表れる史評を反映することが多く批評性は高いが、それらの制作に携わった人々は社会的地位において詠史詩の作者たちよりは低い。それに対して史劇は、文人層により作られた戯曲として読むことをも目的として持った作品と、文人層より低い階層の作者が制作し演劇としての上演を目的としている作品とに分かれ、これらはどちらも史上の人物を称揚する内容になるものが多い。

今回の研究期間においては、特に明朝の初期を扱う史書と文学作品を対象とし、以下の3点を目的とする。

(1) 新たな歴史小説を制作させるに至る原動力の分析

新たな歴史小説は、歴史物語が十分な量に達し、史書・演劇・伝承等を撰取することで制作される。「明英烈」の物語の歴史小説『雲合奇蹤』は、先行の『皇明英烈伝』に続き、明代の万暦年間後期に出版された。『雲合奇蹤』は基本的には『皇明英烈伝』を直接改変することで作られ、新たに多くの話柄を増加している。万暦年間、明朝初期の実録が民間でも利用できるようになったことから、通説に対する考証を行う史書が多く出版された時期にあたる。対して『雲合奇蹤』はおもに演劇・伝承などから話柄を撰取していると考えられる。とくに演劇については、物語の構成を大きく変えるに至る影響を与えた可能性がある。『雲合奇蹤』を生んだ原動力を、

演劇からの話柄の撰取と、同時期に出版された史書における考証との関連から検討する。  
(2)考証により否定された逸話・異説の史書および歴史小説における撰取の分析

既存の研究でも指摘されている通り、明代末期から清朝による禁書が起こるまで時期に明代の歴史について記した史書は、明代の万暦年間、明末、清初と断続的に行われた考証により否定された記事を数多く載せている。また歴史小説と特に紀事本末体の史書は非常に接近している。本研究ではとくに建文時期の史書の記事を中心にし、歴史小説と比較することで、それぞれがどのような立場で、考証され否定された後の言説を取り入れているかを分析する。

(3)文人による独立した詠史詩と、歴史小説における詠史詩の比較

両者の比較により異なる時期や社会層による史上の人物や事件に対する扱い方の相違と共通性を明らかにする。具体的には清・尤侗『擬明史楽府』をはじめとする史書や伝記も残す文人層による作品群と、明代に作られた歴史小説『国朝英烈伝』・『皇明英烈伝』および『雲合奇蹤』等における詠史詩を比較する。このさい、詠史詩の内容が、考証により否定された内容とどのように関わるかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究の研究目的(1)から(3)に対応した具体的な方法は、以下のように整理される。

(1)歴史小説『雲合奇蹤』と史書・史劇との比較、歴史小説制作のプロセスの分析

(2)建文期の朝臣の逸話・異説とそれに対する考証および歴史小説との比較分析

(3)詠史詩『擬明史楽府』と、歴史小説の詠史詩における逸話・異説に対する態度の比較分析

(1)歴史小説『雲合奇蹤』と史書・史劇との比較、歴史小説制作のプロセスの分析

歴史小説『雲合奇蹤』は万暦年間後期に、先行の同題材の歴史小説『皇明英烈伝』に続いて出版された。当時は、実録によって通説に対する考証を行う史書が多く出版された時期にあたる。また、『雲合奇蹤』は、清代以降にはほぼ唯一の明朝開国時期を題材とする歴史小説として、他のジャンルの物語に影響を与え続けた。

研究代表者は研究開始当初、浙江省・福建省に伝わる地方劇のうち、『雲合奇蹤』と関わりが深いと考えられる演目の台本をすでに複数入手し、それらの台本と現在行われうる上演の様相を『雲合奇蹤』と比較することから研究を開始した。これにより、新たな歴史小説を制作する原動力について検討した。

さらに、近代以降に『雲合奇蹤』とは関わりなく発見され、歴史劇の題材となった皇帝朱元璋が娘婿の不正を罰する「朱元璋斬婿」についても検討の対象とした。

(2)建文期の朝臣の逸話・異説とそれに対する

考証および歴史小説との比較分析

建文帝から永楽帝への時代、いわゆる「靖難」の時期は、明朝の歴史の中で、史書における逸話・異説が多いことで知られている。本研究では朝臣の一人である鉄鉉を書く史書・詠史詩・歴史小説・歴史劇を横断して検討し、それぞれがどのような立場で、考証され否定された後の言説を取り入れているかを分析した。

(3)詠史詩『擬明史楽府』と、歴史小説の詠史詩における逸話・異説に対する態度の比較分析

清・尤侗『擬明史楽府』およびその他の明史詠史詩のうち、明朝開国時期を詠んだものについて検討した。史書との比較から、原典を探る作業は訳注を通じてすでにほぼ終わっているが、清代初頭までに考証を通じて否定された逸話や異説が、詩歌として再び取り上げられる様相については、改めて検討した。また、それを歴史小説『国朝英烈伝』『皇明英烈伝』『雲合奇蹤』の中に収められた詠史詩と比較した。これにより、いわゆる士大夫層による詠史詩群と、民間の書肆や書籍の編集に携わる歴史小説の作者による詠史詩の差異を析出した。

### 4. 研究成果

本研究においては、以上の研究方法にのっとり、実施期間中に文献データの収集・整理および電子化、現地での文献調査と聞き取り調査による新たな資料の発見、文献に対する検討作業を通じて、一定の研究成果を得ることができ、また新たな見通しが得られた。

研究方法(1)については、もともと浙江省を中心に伝統的な地方演劇で演じられている『太平春』などの題名を持つ演劇については基礎的な研究が本研究以前に行われていたが、本研究によって、同じ系列にあると思われる演劇がかなり大きな範囲に広がっていることが明らかになった。範囲は江西・安徽・浙江・湖南・福建・広西・四川に渡る。しかも、主人公の少年朱元竜(朱元璋)と軍師劉基、將軍常遇春に加えて一人の樵人(各地で名前は異なる)が中心人物であり、敵としては陳友諒と元の皇帝しか出てこないという物語の構成は、他の詠史詩、歴史劇、歴史小説とは明らかに異なる。これらの演目は特に各地の高腔、弋陽腔を母体として確立された劇種に集中しており、伝播経路や時期を従来の研究から考えると、これらの演目の原型が明代にはすでに形成されていたのではないかと予測され、歴史小説『雲合奇蹤』の成立と関わる可能性を考えることができる。その後、清代以降には歴史小説とは平行した関係であり、具体的な影響をほとんど与え合わないまま現代に伝わったのであろう。

従来の歴史小説および歴史劇に対する研究で想定される歴史書・歴史劇・歴史小説の関係のモデルは、小説および文人による戯曲など、文字化されたテキストが広く伝わり、

ストーリーを支配する力が強い、としてきた。それに対して本研究の調査結果は、民間に伝播した歴史劇を、物語を独自の形で伝達し続ける力を持ったメディアとして捉え直す必要を示しており、明代の歴史文学全体を考える上でも重要な現象であると考えられる。

研究方法(2)については、さまざまな歴史上の異説に対して、考証とその対極にあるはずの歴史文学の双方が、異説を後世に残す役割を果たしてきたという様相を、建文年間の朝臣たちに対する言説を材料として検討した。本研究の期間を通じて、清朝の詠史詩、文人による史劇、歴史小説における比較分析を行い、史書には持ちえない「もし」という仮定を持つことにより、史書を補うという歴史文学のあり方の一端を明らかにすることができた。

研究方法(3)については、基礎的な版本の比較作業を通じてテキスト・クリティークを行い、続く研究への基礎とすることができた。また、研究方法(2)における検討の際、一つの歴史上の事件と人物を取り巻く歴史文学の一つとして文人による詠史詩と歴史小説における詠史詩を比較し、それぞれの様相の一部を明らかにした。

以上の成果は論文の公刊・口頭発表により公表し、(1)新たな歴史小説を制作させるに至る原動力の分析、(2)考証により否定された逸話・異説の史書および歴史小説における撰取の分析、(3)文人による独立した詠史詩と、歴史小説における詠史詩の比較という本研究の目的を達成することができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

川浩二、鉄鉉と二人の娘の史書と小説 建文朝の「歴史」と「文学」、中国古籍文化研究稲畑耕一郎教授退休記念論集、下巻、査読無、2018、pp215-228

川浩二、現代中国の地方演劇における新編歴史劇「朱元璋斬婿」の展開から、多元文化、第6号、査読有、2017、pp.43-65

[学会発表](計3件)

川浩二、明英烈故事發展与《太平春》類劇目演變之探討、第12届通俗文学与雅正文学國際シンポジウム(國際学会)、2017年11月17日、中興大学人文大樓1楼105國際會議ホール

川浩二、南方地方戲中明英烈故事劇目與歷史小説『雲合奇蹤』、東亞視閩中的中國古典文獻與文學學術研討會(國際学会)、2016年09月10日、復旦大學光華樓西主樓1615室

川浩二、現代中国の地方演劇における新編歴史劇、早稲田大学多元文化学会、2016年7月9日、早稲田大学戸山キャンパス32号館128教室

#### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

川 浩二 (KAWA, Koji)

立教大学・ランゲージセンター・教育講師

研究者番号：30386578

#### (2) 研究分担者

なし

#### (3) 連携研究者

なし

#### (4) 研究協力者

なし